慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	はじめに : シェイクスピア : 拡張する世界
Sub Title	Preface : the expanding Shakespearean universe
Author	小菅, 隼人(Kosuge, Hayato)
Publisher	慶應義塾大学アート・ センター
Publication year	2017
Jtitle	Booklet Vol.25, (2017.) ,p.7- 8
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000025-0007

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに

シェイクスピア—拡張する世界
The Expanding Shakespearean Universe

ウイリアム・シェイクスピア（William Shakespeare）は、1564年に英国ストラットフォード・アポン・エイヴォンに生まれ、1616年に亡くなりました。研究者によって数え方は異なりますが、キャノンとしての37本の劇作品、『ソネット集』をはじめとする詩作品、アポクリファとしての数編の共作品は、今日、英国はもとより、世界中で上演され、読まれています。さらにそれらは、様々な芸術分野—絵画、音楽、映画、ダンス、詩、小説、等々—にモチーフを提供する一方、すでに17世紀から、英語圏のみならず他の言語文化圏にも広がり、19世紀以降は、日本を含めて全世界に浸透しつつあります。その意味で、彼の劇作品は、芸術的背景や文化的伝統を異にする人々が感情や思想を語り合う上での「共通言語」と言えます。同時に、シェイクスピアの作品が400年たった今日でも上演芸術／文学テクストとしての力を持っているという事実は、彼の作品が、その深奥にすべての人を感動させる「芯＝心＝神」を持っていることを示しています。すなわち、シェイクスピアの作品は、比類ない「美的価値」を持っているのです。現代人にとって、必須の「教養」としてのシェイクスピアの古典的価値は、それを共通の拠り所として互いの思想を伝達し吟味できるという意味で「普遍的」であり、また、それ自体が圧倒的な美的力を持ちながら、なおそれを基にして自らの思想を表現し、あるいは、それに反発して新しい形式を生み出し得るという意味で「規範的」と言えます。

このアート・センターBooklet 25の企画を起こした2016年はシェイクスピア没後400年に当たりました。それを一つの契機として、シェイクスピアの背景、劇人物、詩作品、ジャンル横断性および文化横断性をめぐる論考を集め、最後に、現代演劇人のインタヴューを掲載することにしました。その広がりを表すべく、このBooklet 25には「シェイクスピア—拡張する世界」というタイトルがつけられましたが、さらに言えば、そのネーミングは、演劇学の専門用語としての「世界」という言葉も意識されていました。

【世界】歌舞伎・人形浄瑠璃劇作用語。作品の背景となる時代・事件をさす概念。実際にはその中の登場人物の役名、それらの人物の基本的性格（役柄）、人物相互の関係、基本的な筋、脚色されるべき基本的な局面や展開などまでを含む概念である。…〔中略〕…したがって個々の〈世界〉は恒久不変的なものではなく、時代的な流行もあり、類型の形成により新生し名目のみ残り使用されなくもなる。作者は役者や観客に共通の知識となっている〈世界〉の上に新しく案出した〈趣向〉を脚色したり、複数の〈世界〉を混合したり

して作品を作る。…（池上文男、『歌舞伎事典』、平凡社、1993年、243頁）

シェイクスピアの「世界」は、単に膨張するだけではありません。それは、個々の作品レベルにとどまらず、総体としても、交代し、変容し、新生しながら拡張している宇宙なのです。

本論集には、慶應義塾大学三田キャンパス、日吉キャンパスでシェイクスピアを講じる専任教員に加えて、荒川裕子先生から素晴らしい論考をお寄せいただくことが出来ました。また、日本の現代演劇をリードする安田雅弘氏（山の手事情社主宰）は『タイタス・アンドロニカス』の演出コンセプトの解説を含む長時間のインタヴューに応じてくださいました。さらに、Booklet 22「コスモス—いま、芸術と環境の明日に向けて」に続いて、表紙デザインは垣本正哉氏にお願いすることができました。垣本氏は「シェイクスピアの全身像を使わず現代的なデザインにして欲しい」という筆者の曖昧で無理な希望を、シェイクスピアの視線がこちらを見つめるという形で見事に生かして下さいました。また、口絵の藤田美菜子さんは、慶應義塾大学文学部美学美術史学専攻を卒業した新進のイラストレーターです。特にこの本のために口絵を描いて下さいました。もちろん、この小冊子ではシェイクスピアの拡張する世界（マクロコスモス）を覆い尽くすことはできませんが、この冊子全体が、表紙も含めて、素敵な小宇宙（ミクロコスモス）になっていることは、ページを捲れば即座に感じていただけることと思います。

これまでと同じく、このBooklet 25は、内藤正人所長を中心とする編集委員会での議論を経て企画されたものです。但し、実際上の不行届きがあれば、その責任は今号担当である小菅にあることを明記しておきます。

慶應義塾大学理工学部教授　アート・センター所員　小菅隼人